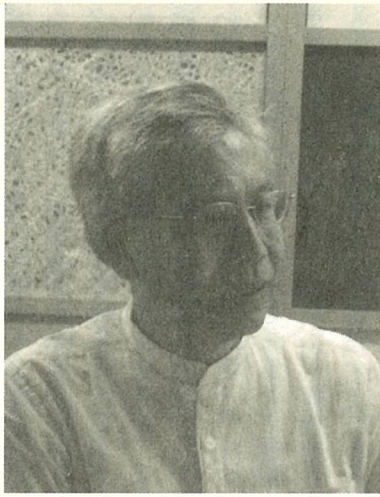


和紙 だより

越前和紙への提言



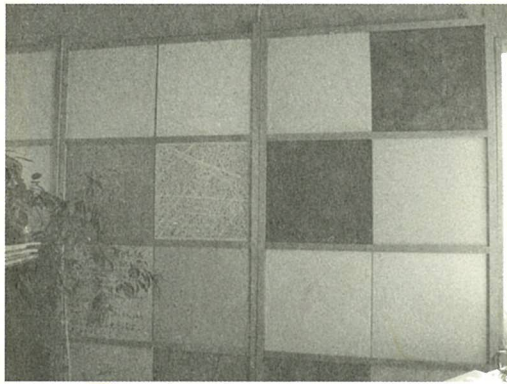
■丸谷博男

建築家。1948年、山梨県生まれ。世田谷区代田在住。(株) エーアンドエーセントラル/NPO梅ヶ丘アートセンターフェローシップ代表。建築家として活躍する一方、三十年間「建築とまちづくり」誌の編集に携わる。本物のものづくり、人間の元気を作るまちづくりと施設づくりを、参加の手法であるワークショップを通して広める活動を行っている。拠点となる梅ヶ丘アートセンターでは、手仕事のすばらしさを伝えるギャラリー展示の他、全国の地場産地の人々とユーザーとの交流が絶えない。

<http://www.a-and-a.net/umegaoka/index.html>

<http://www.washiya.com/b2b/ipec21/sh/sample/077/>

一つは、小さな版木を連続させることで精度の高い模様印刷ができ、それが職人技でまだらにならず一様にできるということ。もうひとつは、長い時間を経て生き残ってきた文様が「デザイン」なのだと感じたことです。個性を主張する「絵」ではなく、抽象化されたものであるが故



丸谷さんのアトリエに展示されている和紙のパネル
お客さんと壁紙などに使う和紙を選択する際に使用する

●唐長さんとの出会い
梅ヶ丘アートセンターにてお話を伺う。
私が和紙と関わりを持つようになったのは、三〇年くらい前、建築雑誌の編集をやっていた、京都の唐長さん取材してからのことです。見開き4ページの記事作りでしたが、その時伺ったお話が大変興味深かった。

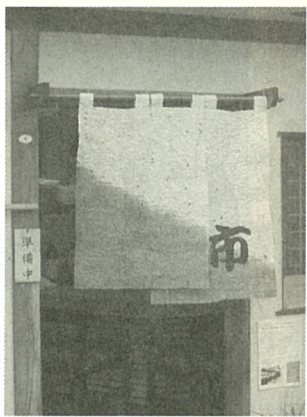
■丸谷博男さん(建築家)
「体験型ワークショップで
ユーザーにワイワイさせる」

に、誰もが愛しやすく、モダンで、しかも組み合わせが無敵なのは、「デザイン」そのものなのです。
十五年経って、アートセンターを開設した時に、唐長さんの六百版の版木を世の中に出して見てもらいたくて、毎年百版ずつ見本帳を作っていたのです。
二十部刷り、十三万五千円という高いお値段でしたが、最終的に五百版の見本帳を作ることができました。

●梅ヶ丘でのアートフェスティバル

「和紙ののれん展」

唐長さんをきっかけに、ギャラリーでも積極的に関わりを取り上げるようになり、越前和紙、茨城県の西の内和紙等の産地の方々とお付き合いするようになりました。西ノ内和紙の菊地さんの所では、その後、服にも使え、洗濯にも耐える「強制紙」というのを教えていただきました。



「和紙ののれん展」で制作された和紙ののれん

昨年、地元小学校と共に開催した梅ヶ丘アートフェスティバルで「和紙ののれん展」をやったときに、雨に濡れてもいい和紙として地域の人々に伝えることができました。

この催しは、梅ヶ丘地域の活性化のために、のれんのデザインを全国公募し、思い思いに漉いた和紙でのれんを作り、街の中に展示してもらおうというものでした。土佐、越前、小国和紙など産地の方も協力していただき、四十カ所に個性あふれるのれんが掛かりました。

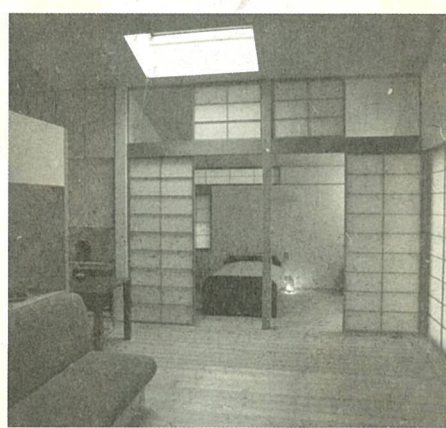


ショップの個性を思い思いに表現してある

世田谷区が「和紙大学」というのを運営していき、地域の小学校では自分の卒業証書を和紙で漉いたり、母親たちも和紙制作に取組んだりしています。のれん展に参加した主婦や子供たちは大感激してしました。梅を漉き込んだり、お店のイメージを和紙に描いたりして様々なのれんを作りましたが、お母さん達のセンスが殊の外良かったのには驚きました。世田谷区のやっている和紙大学と群馬の川場村の和紙産地は姉妹校になっています。一昨年は和紙大学の卒業生と、メキシコの作家たちの作品の展覧会をメキシコで開きました。和紙のネットワークが世界にまで広がっています。

●「ただの白い壁」プロジェクト

もうひとつは、経師屋さんのネットワークがあります。経師屋さんも三十代以下の人は和紙に興味を持っていませんが、和紙を使用した経験が少ないのです。一昨年「ただの白い壁」プロジェクトというのをコーディネートしました。経師屋さんの若手職人や、越前の杉原商店さんにも20mの和紙を協力提供していただいて、和紙で貼りくるんだ住宅を施工段階から全部公開して見せ、できた住宅でコンサートや朗読会を開きました。最初は壁紙に使用した鳥の子紙を、施工しやすいように直張りするよう考えていました。最終的には、繊維が絡み合う微妙な影の美しさを出す為にはベタに張ると和紙の美しさが出てこず、やはり袋張りがいいのだという結論に至りました。



「ただの白い壁」プロジェクトで施工された住宅

完成した和紙の空間がこんなに人を癒すのかと皆さん異口同音に感じしておられ、その時私も改めて実感しましたが、何とも言えない不思議な空気、柔らかい空間になる。やっぱり和紙はクロスとは違う

なあと実感しました。それにはクロスとは違う和紙の扱い方を伝えていく必要があると思います。

●ユーザーにワイワイ言わせる

私は、建築家ですから様々な材料やデザインを実験してみる場がありますし、ギャラリーを運営していることで、そうい



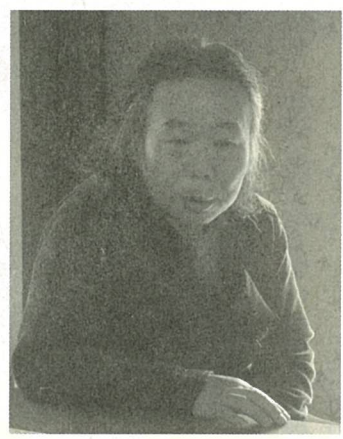
丸谷さんのギャラリーで開催された和紙の展示会

った情報を発信していける場もあります。そこに来てくれるエンドユーザーやお施主さんはその情報を受け取り、又新たな手仕事や伝統工芸などの良さを体験を通じて感じ取っていただけます。地場産業は、新しいことをやるのに大変腰の重い所がありますが、エンドユーザーが面白がつてワイワイのワイのと言っていると、産地の方もそんなものかなあと動き出すものです。産地活性化には、そっちの方が返って早いかもしれませんね。

幅広いネットワークを利用して企画に意味を与え、体験させる丸谷さんの手法は、確実なファンを掴む方法でもある。

■唐長

「伝統の文様と技術を変えず、京都らしく」
<http://www.karacho.co.jp/>



11代当主 千田堅吉さん

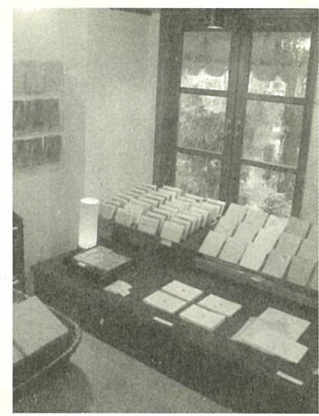
唐長の創業は寛永年間、一六二四年。版木に種々の絵の具を載せ、その上に和紙を当て模様を写し取る。現在まで使い続けてきた版木は六五〇種類。三八〇年間、時を経て作り続けられてきた「京からかみ」は、その完成度の高さで時の粋人を魅了し続け、現在でも桂離宮や名刹の寺院、茶室の襖などに使われている。雲母（キラ）や絵の具を使った美しい文様は、公家好み、寺社好み、茶方好み、町家好みなど範囲は広く、日本の文様デザイン

の原点と言えるだろう。これらの文様は一八七〇年代のヨーロッパの壁紙にも少なからず影響を与え、イギリスのキュー・ガーデン博物館、ビクトリア・アルバート・ミュージアムには唐長の当時の紙が当時のまま收藏されている。十一代目当主、千田堅吉さんに修学院離宮近くの工房でお話しを伺う。

●本物だけを、求めている人に
唐長の紙は、和紙を染め、代々受け継い

できた版木で模様を付ける。四百年もの間使い続けている六五十種類の模様は様々な時代を経て生き残ってきたものばかりである。模様のパターンも付け足さない、昔からの技法も絶対に変えない。現代はいわばインスタント時代で、同じような模様であるならそれでもいいという建築家やインテリアデザイナーも多いが、唐長は頑なに伝統を守ってきた。そういう特殊性を守っているからこそ唐長なのだと言っている。時代に逆行しているかもしれないが、リーダーシップを握り、無理なく長く継続していける仕事を通じて、本物を求めている人だけにこの「京からかみ」は提供される。

●和紙を活かす文様

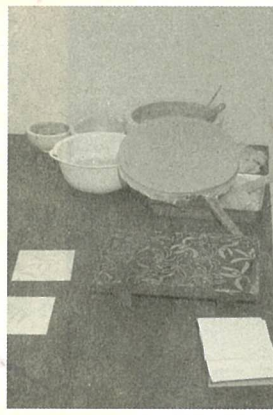


修学院にある唐長工房に併設されたショップ内部

昔から越前和紙とは関わりがあり、地元和紙問屋さんとの付き合いも長い。唐長の文様の素晴らしさは、和紙をただの素材として見ているのではなく、無地の部分を意識した文様にある。模様を施すときに、版面のように紙をこするのでなく、そっと載せるので紙本来の色や質感が余白に生かされる。上質の紙はつやがあり、その上に時代を経て淘汰された、流行りすたりのない安心できる色と

文様が載るといふ、計算され尽くした美を追求してきたのだ。

いい和紙は無地でも素晴らしいが、ちょうど空間や雰囲気に合わせて、しゃれつぎを出してみたい時に、最高の、しかもジヤマにならない完成度の高いデザインが施されると考えることができよう。文様が紙の無地を引き立て、質の高いしつらえを完成させるのである。



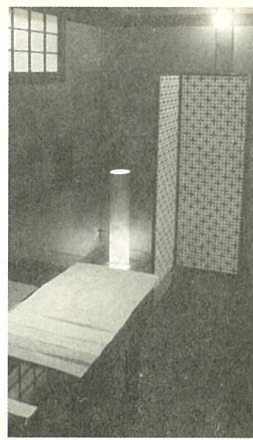
工房では手作業で制作が行われている

● 京都の新名所 COCON への出店

伝統を頑なに守っているといっても、本物を探す努力をしている人に門前払いしているわけではない。最近、京都中心部（四条烏丸）にできた複合商業施設、COCON KARASUMA の一階にアンテナショップを構えた。ここでは、唐長の模様を収録した本やレターセット、カード類などの小物を置くと共に、本物を伝える文化的活動を行っていきたくと考えている。今年のゴールデンウィーク期間中には、唐長の模様を紹介する展覧会「雲と波」を開催すると共に、模様のシンポジウムやポストカードなどを制作してみるワークショップを開催した。

「模様の旅」と題して講演を行ったケルト模様の第一人者である鶴岡真弓氏は、二一年前のケルトの模様の中に唐長の模

様と同じものがあり、ヨーロッパの田舎から時空を越えて、日本に旅したかのよくな模様のロマンに目を輝かせていたという。八月十二日〜九月四日には、第二回唐長文様展「琳派と唐紙」を開催。唐長の版木の中には琳派の代表する光琳・光悦模様が多数あり、そこには独特の間が存在するという。当時の芸術運動と模様の関係をひもとく興味深い企画だ。唐長では、今後このような文化的活動を推進するため「唐長美術館」という文化研究所を準備中だ。大学生や若い層にも、継承されてきた本物の文化を伝えていきたいと千田さんは抱負を語る。



唐長のからかみを用いたインテリア提案も行われている

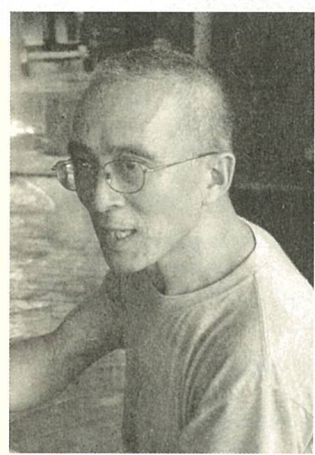
様々な時代を旅してきた数ある唐長の模様の中でも、とりわけ「波模様」が好きだと千田さんは語る。「これが江戸時代のものかと考えると素晴らしいといつも思います。シンプルで、モダンでありながら、模様がしゃしゃり出るのはなく、ちよつと引き気味で気品がある。これを使うと空間に何と言いますか、時代時代の日々の暮らしの空気感のようなものが出ます。」

時代に逆行するように見えながら、実はしなやかに時を越えていく京都流の商いの方が唐長にはあるようだ。

■ 漉き場探訪

■ 沖桂司さん

沖水彩画用紙製造所



沖桂司さん

MO紙と聞くと、一見コンピュータ用の紙かな？と考える方も多いのではないだろうか。MO紙とは先々代の沖茂八（おきもはち）氏の頭文字をとって命名され、発色の良さで定評のある水彩画用紙のことである。一仕事を終えた沖桂司さんに、大滝の工房にてお話を伺う。

● 溜め漉きの特長を生かす

和紙の漉き方には大きく二種類あります。一つは流し漉き、もうひとつは溜め漉きで、ここ越前ではうちのような溜め漉きは少数派になるでしょう。漉き船に原料を細かく砕いたものを水の中に漂わせ、それを漉きゲタですくい上げる方法です。流し漉きの場合には長い繊維を使い、トロアオイを入れるためにねばりを持ちますが、溜め漉きはただの水だけのさらさら状態で紙を漉きます。水切れが早く何回も揺すっていられないので瞬間勝負です。溜め漉きは厚い紙が得意です。料理に例えるならば、流し漉きがあんかけ

状態、溜め漉きがあんかけがない状態と言えるでしょう。これら技法の違いによって、紙の強度も異なり、用途が分かれます。紙の強度には二種類あり、こすつたりする摩擦に強いのか、やぶいたりさけるのに強いのです。流し漉きは繊維が長いので絡みは多いのですが、こすると繊維が毛羽立ってよれやすい。溜め漉きは繊維が短いので絡まりが少なく、やぶけやすいのですが、こすりに強い。同じ原料を使っても、育ちが違うと紙の性質が違うのがおわかりかと思えます。ここでは、このような技法で主に水彩画用紙や銅版画用紙を作っています。



沖さんの工房におかれた脱水用の油圧プレス機

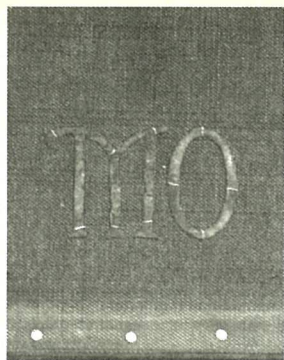
● 版面用紙にも向き不向きがある

版面用紙にも向き不向きがあつて、木版画には流し漉き、上から強く圧力を加える銅版画には溜め漉きの紙が適しています。流し漉きはトロアオイの作用で空気の層があり、ふわーつとしていてソフトですので、バレンなどでそつと絵を写し取るにはいいのです。溜め漉きの紙は、空気の粒が少なくいわば硬くて厚い紙ですから、銅版画のようにプレスする力に耐えなくてはならないものやシルクスクリーン、リトグラフの様に多色刷りする場合には、誤差が少なくよいので

芸術家は自分の作品を十二分に表現するために、これら紙の特長をよく見極めながら選んでいる訳です。

●MO紙の開発

先々代の茂八は、戦前、流し漉きが主流で奉書や局紙を漉いていました。昭和十年代、戦争が長引くにつれ、それまでフランス、イギリス、イタリアから輸入していたデッサン用紙や水彩画、版画用の紙が次第に入らなくなり、画壇から紙がなくなっていくたのです。ちょうどおじいさん（茂八）も和紙で何か画材ができなかつたかと考えていたところへ、画壇の方から画用紙に適するような紙を和紙で作れないか研究してみてくれないかと相談を持ちかけられたのです。しかし、技術はあつても、すぐには業界には受け入れられません。何度も画壇の人にア



MO紙のすかしを入れる為の板
洋画家石井柏亭のデザイン

ドバイスを受け、相談し、輸入画用紙の成分を研究し、やりとりを重ねてやっと和紙で画材として耐えうる品質のものを開発するのに成功しました。たどり着いたのが、麻、綿、パルプなどを混ぜて、表面強度を強くし、発色の良いMO紙でし

た。MO紙という名前は、ずっと相談に載ってくれていた洋画家石井柏亭先生の発案で横文字風のものにし、MOの文字も先生がデザインしてくれました。うちのMO紙にはそのロゴが透かして入っています。

●MO紙が愛される理由

水彩画用紙にはイタリアのファブリーノ、フランスのアルシュなどがありますが、和ものではMO紙がこれらに並び称されています。繊維が短かく平滑で擦れに強く毛羽立ちにくいので、消しゴムが使えて、筆さわりもよく、特に発色がいいとご好評いただいています。水彩画にとつてもっとも大切なことは絵の具の発色で、色の出具合が紙によって驚くほど違うのです。絵描きさんの作風によって、フラットな紙、でこぼこの紙、インクのにじみ具合、ドーサ引き（コーティング）の有無を使い分けます。ドーサ引きはいわばにじみ止めで、絵の具のしみこみ具合を微妙に左右します。現在、水彩画用にはドーサ引きと吸い込みタイプ、版画用はドーサ引きだけを留意しています。最近ではパソコンプリンターで写真や文字を印刷できる紙を、メーカーが個別にリサーチしています。発色がよく紙粉が出ず具合がよいということ、プリンター用の紙も漉くようになってきました。MO紙の原料を少しアレンジして製造しています。原料の麻の処理は水も多く使いますし、手間暇がかかります。

情報欄

● イベント情報

■ 丹南産業フェア2005

時：9月17日（土）～19日（月）

場所：サンドーム福井

「紙漉き体験（はがき）と紙製品即売」

■ いまだて祭り（イマダテワッショイ）

時：9月17日（土）～18日（日）

場所：今立ふれあいプラザ付近特設会場

「和紙製品即売」

■ 武生菊人形イベント

時：10月1日（土）～3日（月）

場所：武生市中央公園特設会場

「青年部による紙漉き体験（はがき）」

■ きんぎ工芸品フェア2005

時：10月7日（金）～10日（月）

場所：インテックス大阪6号館

「墨流し実演・体験/和紙製品即売」

■ 東京いまだて物語2005

時：10月12日（水）～16日（日）

場所：港区「エコプラザ」

「素の紙展」「福井伝青展」「墨流し・紙漉き体験」

「和紙製品即売」

■ 全国手すき和紙連合会研修会

時：10月16日（日）～18日（月）

場所：京都「からすま京都ホテル」

■ 第20回 国民文化祭 和紙文化和紙フェスティバル

時：10月22日（土）～30日（日）

場所：ふれあいプレザ・いまだて芸術館・卯立の工芸館他

「全国の和紙、折紙等展示・実演・即売」

■ 産業文化フェスティバル

時：10月28日（土）～30日（日）

場所：サンドーム福井

「生漉奉書漉き実演・墨流し実演体験・展示」

■ 伝統的工芸品月間国民会議全国大会関連行事

時：11月2日（水）～6日（日）

場所：熊本県 熊本市民会館 他

素の紙展

時：2005年10月12日～10月16日

場所：港区「エコプラザ」

東京いまだて物語2005会場内

東京都港区虎ノ門3-6-9

（日比谷線神谷町駅より徒歩五分）

好評をいただきました今立での展示に新作を加えて、東京にて開催します。住宅の内装やインテリアなど、現代的な空間に活かしていただきたいモダンな素材としての越前和紙を展示します。

編集後記

この「和紙だより」をご覧になった方からのお問い合わせも少しずつ増えて参りました。和紙の世界をつなぐ媒体として、これからも地道に取材を重ねたいと思います。情報の提供も歓迎いたします。（よ）

季刊-和紙だより 第8号（2005年秋号） 発行日：2005年9月20日

※無断での転写・転載はお断りいたします。

発行人：福井県和紙工業協同組合 長田昌久 住所：福井県今立郡今立町大滝11-11 TEL：0778-43-0875 FAX：0778-43-1142

編集人：右衛門佐美佐子事務所 右衛門佐美佐子・北條崇 編集所：〒606-8225 京都市左京区田中門前町90 TEL：075-702-6548 FAX：075-702-6223